

「(仮) 飯山ぷらざ」建設設計及び監理業務 公募型プロポーザル 審査講評

プロポーザル審査委員長 中村良夫

都市、まち、風景、庭、回遊、道、市民など全提案に共通した言葉の群れは、建築単体の造形主義の時代の幕が降り、新しい風土の時代の到来を告げていた。

芸術・文化機能と交流・にぎわい機能という「(仮) 飯山ぷらざ」建設検討委員会の二つの要請に関し、ともかく前者が具体的な提案を引き出し得たのに対し、後者はあまり成功したとはいえない。提案書の中で踊る市民参加に関する言葉の群れは、概ね設計者の机上の空論の域を出ていないだろう。

建築家の夢想する市民の活動や賑わいをどう空間に割り当てるかという発想が支配的な中であって、審査委員長賞の(株)ヘルムの提案する市民団体や商店会の連合体「ジチカイ」は、賑わいそのものの発生を促す装置であり、その身体的熱気のなかから建築を発芽させようとする、コミュニティ・デザインの領域に挑む実務的提案として注目された。存亡の危機に立つ地方都市にとって何より大事なのは市民の絆と生きる力だ。しかしながら、この愛郷型の提案が不可避的に持っていた勾配屋根の蔵や、その分棟配置をつなぐ雁木という風土的イメージは、雪の処理に苦悶呻吟する豪雪地帯の市民にとって、いかにも荷の重いものであり、その懸念を払拭することはできなかった。同じようにペリクラークペリアーキテクツジャパン(株)、(株)野生司環境設計、(株)ジェイアール東日本建築設計事務所などの提案も風景性、市民紐帯性、縁側性などの風土的親和性の点で注目されたが、惜しむらくは、勾配屋根、分棟、雁木などについて、豪雪対策の困難から議論が収束しなかった。とはいえ、暖炉のあるホワイエ、山の風景を美しく見せる雁木配置、可変型ホール、洪水レベルを超える施工基準面と駐車場の地下化などはいずれも捨て難い提案であった。実施設計において、大いに参考にされて欲しい。

最優秀者の(株)隈研吾建築都市設計事務所、優秀者の(株)梓設計はいずれも雪対策、対災害、自然型環境調整、コミュニティ性、都市回遊などが全体のデザインのなかで比較的バランスよくまとめられている。後者において、やや平面配置が窮屈なのに対し、前者における空間の多様性と柔軟性は大小様々な市民活動を受け入れる人間生態の観点から、その懐の広さがおおかたの好感を勝ちとった。

北信州をふわりと囲む翠巒(すいらん)を軽々と貫いて走るフラットルーフの長大な直線は、ひとつの張りつめた問答を起すであろうが、それとは別に地場の木材と和紙をもちいた内装デザインや、裏側がない内外の開放性が秘めている新しい風土的親和性に期待したい。

今回の技術提案競技は、伝統的な風土的表象への愛着と、豪雪という風土的災厄への構えが必ずしも平仄の一致を見ないという事実をつきつけた。審査委員会としても必ずしも予期し得なかったこの矛盾を今回の提案競技の苦く、そして貴重な問題提起として報告しておきたい。

財政難と人口減に喘ぎながら、「(仮) 飯山ぷらざ」という背水の陣を敷いて活路を開こうとしている飯山市民の覚悟に共感し、志を同じくしてくださった17件の提案チームにあらためて心より敬意を表し、お礼を申し上げたい。

以上